

## 復活節第三主日

2013.4.14

ヨハネ 21・1-14

今日私たちはここに集って、復活節第三主日のミサに参加しています。その復活節第三主日の今日のミサの中で、私たちは今、ヨハネ福音書 21 章に記されている、復活されたイエス・キリストの三度目の弟子たちへの訪れを語る福音を聴きました。

思い返してみると、先週の復活節第二主日のミサで、私たちは、ヨハネ福音書 20 章に記されている、二回の週の初めの日に渡る復活の主の訪れを語る福音を味わいました。先週の日曜日に聴いたヨハネ福音書 20 章の結びの部分であらためて思い起こして見ると、そこには、最初の主の訪れに立ち会うことが出来なかったトマスが、それから一週間経った二度目の復活の主の訪れを受けて、「わたしの主、わたしの神よ」と叫んだ信仰告白の叫びが響いていました。トマスのこの信仰告白の叫びに答える、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は幸いである。」という復活された主のことばをもって、ヨハネ福音書全体が私たちに語ろうとしてきたことは、いわば一旦幕が降ろされるかのようにつながれています。

先週私たちが聴いたヨハネ福音書は、復活されたイエスのトマスも含めた弟子たちに対する二度目の訪れを語った後で、次のようなことばをもって結ばれていました。「このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさしたが、それはこの書物の中に書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名によりいのちを受けるためである。」

このように、ヨハネ福音書は、復活されたイエス・キリストが弟子たちのもとを訪れてくださり、弟子たちはその復活されたイエス・キリストを見たという、いわゆる、「復活されたイエスの顕現」の物語をもって幕を閉じています。福音書の中の弟子たちと私たちの間には、私たちの側からは越えがたい幕が降ろされたのです。確かに、私たちは福音書の中に語られている弟子たちのようには、復活されたイエスを見ることはありません。その意味では、福音書の中に語られている復活されたイエスを見る事が出来た弟子たちと私たちの間には、越えがたい幕が引かれているのです。けれども、復活されたイエスのトマスに語られたあの最後のことばは、降ろされたその幕の奥から私たちに向かって今も響いてくるのです。福音書が語るイエスの物語に幕が降ろされた後、その幕の向こうから響くイエスのことばが私たちの心を打ち、私たちがそのことばを自分たちに向けてなお響き続けるイエスの呼びかけとして受け止める事が出来る時、復活されたイエスは再び幕を上げて、私たちの前に立ってくだ

さるのです。ヨハネ福音書 21 章の今日の福音に語られている復活されたイエスの三度目の弟子たちへの訪れは、そのようなイエスのお姿を私たちに示していると受け止めることが出来るのではないかと思います。

ヨハネ福音書 21 章に語られている、私たちが今日のミサで聴いた福音は、私たちがティベリアス湖畔に誘います。そこは、その湖の漁師であった最初の弟子たちが始めてイエスと出会った場所です。こうして、今日の福音は、福音書に語られてきたイエスと弟子たちの出会いの物語を回想するように、私たちが招いていると受け止めることが出来ると思います。

今日の福音に登場するシモンは最初のイエスとの出会いの時に、ペトロという名を授けられたのでした。あなたが巖だとイエスに信頼を寄せられたペトロは、しかし、イエスの受難の時に、もろくも、三度まで自分はその人を知らないといイエスとの関係を否認してしまったのでした。トマスは、自分の目で見、自分の手で確かめなければ、決して信じることはできないと最後まで言い張っていたのでした。ナタナエルは、フィリポからナザレのイエスのことを聞いたとき、メシアがナザレなどから出るはずはないと掃き捨てるように言ったのでした。ゼベダイの子たちは、イエスの行く手に待ち受けている十字架の苦難を予告された後でもなお、イエスの右と左に座るといこの世的な栄光の座を願っていたのでした。そのような彼らは今再び、イエスと出会う以前の自分たちの生活の場に戻ってしまったかのようです。「わたしは漁に行く。」と言い出したペトロのことばに応じて、「わたしたちも一緒に行こう。」と、数えると全部で七人もの弟子たちが舟に乗り込んだと語られています。弟子たちが乗り込んだ船はそんなにも大きかったのでしょうか。ここにすでに、ヨハネ福音書 21 章の物語が私たちに語りようとしていることが暗示されているかのようなのです。不信の弟子たちを乗せたペトロの船は、教会のシンボルです。その舟に乗り込んだ彼らが闇の中で一晩中追い求めた苦労は何一つ報われることがなかったのです。そんな夜の闇が去った夜明けの彼岸に復活されたイエスは再び立ってくださいるのです。ヨハネ福音書の 20 章の終わりで一旦幕の奥に身を隠されたイエスは、このようにして再びその幕を開いて、そのお姿を示してくださいるのです。弟子たちの目にはそれが誰だか直ちにはわからなかった、弟子たちの彼岸に立たれた復活の主は、「子たちよ、何か食べるものがあるか」と問いかけてくださいるのです。夜の闇を抜け出るようにして、空手で帰ってきた弟子たちに、復活の彼岸に立たれたイエスはこのように呼びかけてくださいるのです。そして、その彼らをあの最初のイエスとの出会いの時の出来事に連れ戻してくださいるのです。あの最初の出会いの時にペトロとその仲間たちが経験した奇跡の大漁を復活の主は再び彼らにもたらしってくださいるのです。こうして、あの最初のイエスとの出会いのときにペトロとその仲間たちが経験した出来事は、そこから始まった弟子たちの、イエスの弟子としての歩みがイエスの十字架の死によって

閉ざされてしまった後に、今度こそ、夜の闇を越えて復活の朝の彼岸に立って、不信の弟子たちに「子たちよ」と呼びかけてくださる復活の主によってもたらされた出来事となったのです。

ここに語られている出来事の意味を最初に見抜いたのはイエスの愛しておられた弟子であったと語られています。その弟子が、夜明けの岸辺に立つその人を見て「主だ」と叫んだのです。ヨハネ福音書全体の締めくくりをなす、ヨハネ福音書 21 章の末尾には、ここに語られていることを証し、それを書き記したのはイエスが愛しておられたこの弟子であると記されています。

復活節第三主日の今日のミサの中で私たちが聴いた福音は、イエスが愛しておられた弟子を通して私たちに告げられているのです。今日の福音を、私たちが信じる復活の主イエス・キリストの私たちへの現われとして、心のうちに深く受け止めることが出来るよう、私たちにも向けられているイエスの愛を信じる恵みを願い求めたいと思います。そのためにも、復活の主がそのいのちをもって私たちのために用意して下さった復活の朝ごとのこの食事の席に、心からの愛をこめて近づかせていただきたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高